

海の上の動く研究室 豊潮丸は今

生物生産学部
海洋生物生産学講座

松田 治

はじめに

生物生産学部には、農場、水産実験所、豊潮丸(とよしおまる)などの、人目に触れにくく、しかも一味がった付属施設が多いが、中でも豊潮丸はいつも海の上で動いているという、ユニークな付属施設である。

豊潮丸は、文部省のお役所的区分では「練習船」に属するが、実際の使われ方は丁度、研究調査船と実習船の間くらいである。三百二十トン、約四十五メートルの白い船体は、ベッド数二十三(乗員分を除く)と専用のラボ、高性能STD(水温塩分水深連続観測装置)や各種観測用装置を

備え、船長以下十二名の船舶職員によって運航されている。

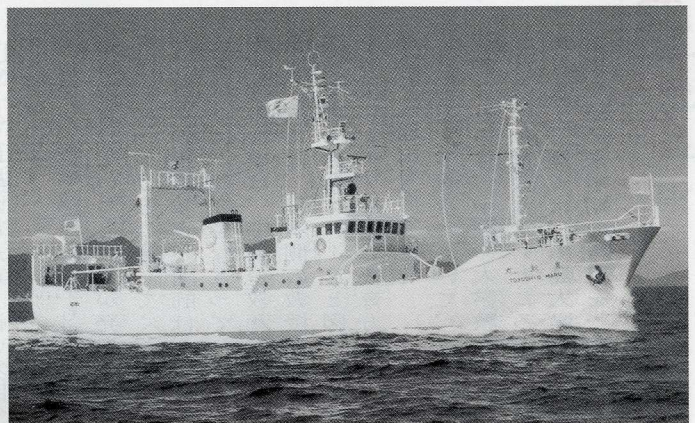
母港の呉港には、専用棧橋のほか三千平方メートルちかい基地をもち、三階建ての立派な陸上施設が豊潮丸を支援している。

海の上の動く研究室「豊潮丸」

学部の学生にとって、豊潮丸は実習船のイメージが強いであろう。私自身も、毎年の実習で三年生と海洋観測をともにしているが、ごく普通の学生にとって、二十四時間、教官や船員と寝食をともにし、いわゆる「同じ釜の飯を食い」、何日も現場で共同作業や生活にあたるということは、ほとんど初めての経験のようである。教室では決して見られない生き生きとした個性やリーダーシップが発揮されるのもこんな時でお互いの理解や信頼感が明らかに深まるのを感じる。

そんな意味で、豊潮丸は、大学教育が次第に専門化・効率化する過程で失ってきた「学び舎」の機能を、未だ失っていない。学生が自主編集している交流雑誌のタイトルが「とよしお」であり、同窓会ではきまつて豊潮丸航海のことが語り草となるのは、このことと無縁ではなからう。

一方、院生や教職員にとって、豊潮丸には研究船のイメージが強い。中四国他の大学にこのクラスの船が全く無いこともあって、豊潮丸は、広島大学のみならず、瀬戸内海などの研究者にとって無くてはならない船となっている。実際、豊潮丸は関



附属練習船 豊潮丸

全長	44.70m	調査・研究設備	
満載吃水	3.67m	CTD測定装置	1台
定員	合計35名	海洋ウインチ	2台
定型	巾 8.30m	トロールウインチ	1基
総トン数	320.73トン		
通常航海速度	10.5Kt		

こんな豊潮丸も建造後十六年目を迎え、次世代の豊潮丸(代船)の建造を考える時期となった。通常耐用年数が二十年程度とみられているからである。

平成五年に、我々は豊潮丸代船建造計画委員会を発足させ、次世代の船は、どんな考え方にもとづいたどんな性質の船がよいか、地道な検討を続けてきた。現在、ようやく基本的なコンセプトが姿を現わしたところである。今後、船体構造などのハード面や、観測機能、利用法などのソフト面の計画立案には、ぜひとも全学からアイデアやご提言をいただきたいところである。

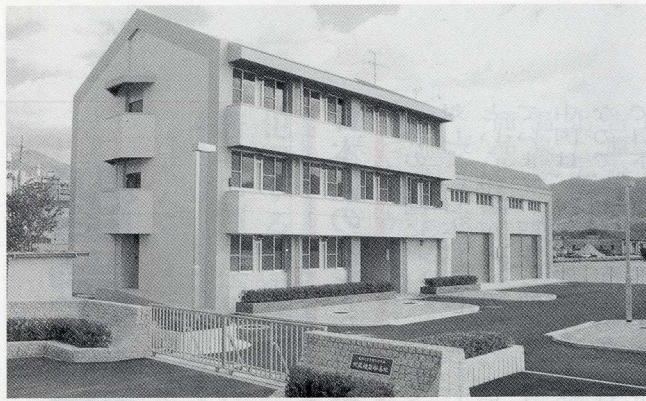
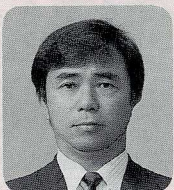
瀬戸内海はざーっと世界の海につながっているのだから、瀬戸内海に次世代の豊潮丸を浮かべることは、広島大学のキャンパスが広がることでもあり、広島大学が新しい広がりをもつことでもある。もとより代船の建造には大規模な予算が必要であり、その実現は容易ではないが、豊潮丸の将来的役割をよくご理解いただいた上で、ご支援ご協力いただけるよう、この場をかりてお願いしたい。

プロフィール

(まつだ・おさむ)

◆専門は水圏環境学、特に沿岸海域における親生物元素の循環過程

◆豊潮丸代船建造計画委員会委員長



生物生産学部附属練習船基地

敷地面積	2,675㎡	網干場	600㎡
建物面積(延べ)	837.15㎡	海水貯水槽	20t (2×5×2m)
	(鉄筋コンクリート製)	調査艇	かもめ1.7t (ヤンマーFRP製)
浮き桟橋	40m		
機器調整用水槽	2基		

次世代の豊潮丸は?

瀬戸内海は、周辺の関連人口約三千万人といわれる、世界でも有数の人間活動の影響の強い閉鎖性海域のため、環境科学の優れた「実験海域」となっており、豊潮丸は、現在進行中のIGBP(地球圏生物圏国際共同研究計画)などの地球規模の国際研究にも参画している。また、これまでに中国や韓国の研究機関も訪れており、近隣諸国との研究交流も進めつつある。